

創立90周年 自由学園美術工芸教育発表会

「アーカイブズ展示」

自由学園 最高学部 数理モデルとインターフェイス 大柳 陽一

2012年美術工芸教育発表会においては、自由学園の美術教育の歴史を示す展示として「アーカイブズ展示」の会場が設けられた。展示の構成の検討、レイアウト設計、施工については、最高学部の数理モデルとインターフェイスグループ（テーマ別グループ研究）が担当した。この作業に関しては、単に製作担当ということだけではなく、その製作過程をプロジェクトマネジメントの視点から再検討し、その成果は当グループの2012年度卒業研究のテーマとしてまとめた。展示活動としてのアーカイブズ展示は、会期中とその後一週間にわたって展示された。卒業研究については、日本教育工学会の研究会にて学生が報告する機会を得、どちらも社会に成果を問う活動となった。

1. はじめに

数理モデルとインターフェイスグループは、最高学部卒業研究の6つのグループの一つであり、2012年度は数理グループと情報グループに分かれて、それぞれのテーマに取り組んできた。

2012年3月に「創立90周年記念自由学園美術工芸教育発表会」の中で、自由学園の美術教育の歴史を示すための「アーカイブズ展示」の計画とその製作のお話を頂き、展示活動を担当したのは、情報グループに所属した学生である。情報グループには、4年生8名と3年生3名が所属しており、この11名と教員らによって、準備をすすめてきた。

また、4年次の学生は、単に展示活動の準備に従事するだけではなく、その活動全体をプロジェクトマネジメントのケーススタディに、この展示活動を客観的に捉えた研究を行ってきた。

ここでは、具体的な作業内容を中心に、その活動のねらいをまとめてみる。

2. 展示活動の内訳

まず、プロジェクトチームの構成を、以下の3つのグループ（班）とした。

- 1 マネージメントグループ（マネージメント班）
- 2 コンテンツ立案グループ（コンテンツ班）
- 3 展示設計グループ（展示班）

各グループは作業の範囲を明確にし、担当者は専門的な仕事を受け持つ。最終的にマネージメントグループが、作業状況から作業予定を決定する組織である。もちろん状況に応じて横断的に作業チームを再編成するなどの柔軟性もある。

3. スケジュール

2012.3.10に、河原先生、ゼミ主任遠藤敏喜先生と筆者にて、展示内容に関する打ち合わせを行い、今後の作業進捗の方針を確認した。

マネージメント班は、7月からは美術工芸教育発表会までの5ヶ月間については、全員のスケジュール管理と、進捗状況の確認を担当した。

コンテンツ班は、3月と4月に各班の学生らは、それぞれの担当分野の基礎勉強を行った。並行して、矢野学園長、資料室村上先生、初等部山下先生、美術河原先生と、コンテンツ班の学生を交えて、アーカイブズ展示の方針を決定する為のミーティングを行ってきた。7月～8月は、具体的な展示構成に関する打ち合わせとともに、展示品の撮影、資料収集を行ってきた。

展示班は、5月より具体的な展示方法を決定する為に、会場として割り当てられた記念講堂音楽室の探寸、展示パネルの設置方法、展示に流用可能な学内の資材の確認を行ってきた。特に9月以降は、具体的な施工方法の検討のため、展示会場の精密な設計（CADなどによる）、部品試作などを行って、最終的な製作プロセスを立案した。

4. コンテンツの決定

コンテンツの選定については、資料室村上先生を中心にご指導頂きながら、学生らが図書館に詰めて、作業を進めた。膨大な展示候補があり、またそれらを効果的に構成する為に、多くの時間を割り当てる事となった。当初は、展示内容の検討、選定については、学生が担当する予定ではなかった

が、展示内容の検討に踏み込む事で理解が深まり、その後のカタログ製作や、発表会期間中の会場運営に対するモチベーションを高める効果があった。

5. 展示設計

アーカイブズの展示における自由学園の代表としての位置づけは、他の展示会場よりも高い。展示内容の精査だけでなく、その表現手法についても、高いレベルにあることが求められる。

とはいえ、様々な制約から大掛かりな専用展示パネルや台を新たに製作する事は、現実的では無かった。今回は、従来と全く異なる方法で、高品位な展示を行うことが、研究課題となった。

高品位な展示を実現する上で重要な要素の一つに、空間の外界からの「隔離」がある。会場である記念講堂音楽室の問題は、使用可能な壁面の約半分が、窓である点であった。これを、どのように遮るかが設計上の大きな課題であった。

今回の展示については、照明計画に関しては、会場の室内照明機材以外の使用が困難で、外からの採光は必須であった。そこで、窓面全体に、トレーシングペーパーを垂らし、外光を散乱光（デフューズ）させることによって、遮蔽と照度の確保を実現する方法を採用した。当初は、デフューズのみでの予定であったが、ここにも情報をプリントして、結果的に巨大なパネルとして使用することができた。

もう一つは、会場の壁面の遮蔽である。掲示の制作方法に関しては、DTP的にPCにてレイアウトを行い、大判プリンタで出力（インクジェットプリント）が前提であった。それらを掲示する際には衝立パネルなどに貼付ける工法が一般的であるが、プリントされた用紙がそのまま掲示可能であれば、様々な点で有利である。そこで、プリント用紙を吊るす方法（懸架）を検討した。

まず、使用される場所を二つに分け、それぞれに用紙を用意した。一つは前述の窓面に用いたトレーシングペーパーである。もう一つは、これは、主として年表や、作品の写真などに用いるための用紙である。この用紙には、裏側が透けて見えないことと、懸架した際に、破損しない強度をもつこと、及び、インクジェットプリント適性がある必要がある。幾つかの用紙で試作した結果、コースターなどに用いられている、パルプに類似した特殊紙を

使用する事とした。

次に、プリントした用紙を懸架するための基礎を考える必要があった。当初、木材で骨組みを構成する方法で検討したものの、部材のボリュームや、会期終了後に残る残存物の処置を考えて、木材の使用は最小限に抑える方針となった。学内には、現在は使用されていない鉄製足場材と、そのクランプなどが多数存在していたため、それらをレストアして使用した。足場材とクランプを使用した事によって、部材総数は大幅に削減できた。

6. デザイン

デザインは二つの面から検討した。一つは、構造上のデザイン、もう一つはインターフェイスとしてのデザインである。展示物の形状から伝えるべき内容と、文字やレイアウトから、自由学園らしさ、高品質なイメージを与える事が目的である。

構造上のデザインについては、特にその年表の製作にその意図が込められている。年表とは自由学園の歴史である。美術教育が綿々と今日まで続いていることを示す為に「形」はどうすべきか。この年表が、継ぎ目無く、シームレスであるのはその意図によるものである。この年表の横方向は、約13mであり、それらを4段重ねて、年表面が構成されている。横方向は全て、連続プリントして製作したものを接続して一枚の紙面に施工されている。裏面に部分的な補強をし、専用マウントで懸架して展示した。この一連の作業には、非常に高度な技術レベルが必要であるが、学生は本番では、殆ど失敗すること無く施工する事ができた。事前のシミュレーションの成果と考える。

7. まとめ

このプロジェクトを進捗させる中で、学生らに伝えたかったのは二点ある。一つは対峙する未知の事象に立ち向かう重要性を理解すること、もう一つは取り組んだ仕事が、一般社会の中ではどの程度のレベルにあるかを知ることである。今回は一定レベルの展示品質は得られたと思われるが、一流の展覧会品質には、全く到達していないことは残念ながら事実である。この程度では世界では全く通用しない。しかしながら、学生はその点を実感していた様子は感じられる。彼らの今後に期待する。



写真 1 展示状況。写真は年表部分。垂直の展示面は、約4m×13mのサイズである。展示面の前に、台を設置し、自由学園美術史に関連する書籍、学園新聞（複製）などを展示した。

年表部には914mm幅のプリント用紙を使用し、13m連続でプリント後、つなぎ合わせている。この作業は、記念講堂のステージ上にて行なわれた(写真12)。つなぎ合わせた後、展示台骨格に設置した(写真13)。用紙部の重量は10kg以上にもなる。



写真 2 展示会場、入口メインタイトルパネル。ここは質感を出す為に、木製パネルに貼付けてある。



写真 3 会場中央から入口方面の展示。窓を大きなパネルに見立てた展示。



写真 4 会場入口から出口方面の展示。窓面から取り込まれた外光が、室内の明るさを支えている。



写真 5 展示をご覧になるお客様。

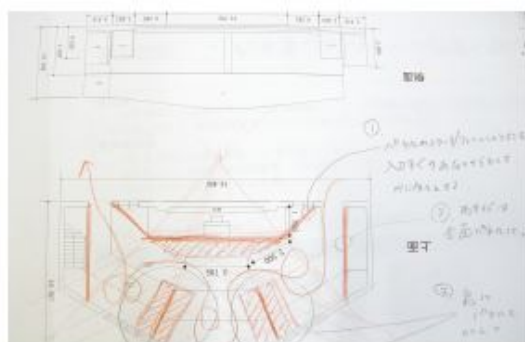


写真6 展示レイアウトのイメージスケッチの例。会場の施設図面を用意し、そこに書き込んでいる。



写真7 イメージを基に、実際に模型を製作し、スペーシングを確認する。これは紙製の模型の例。

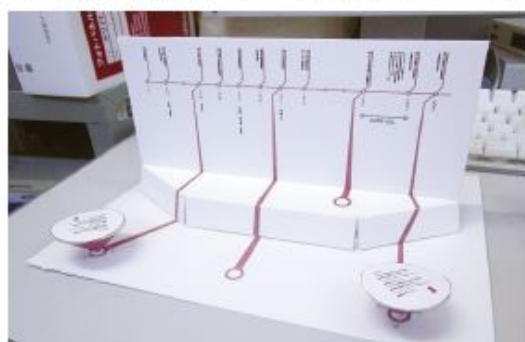


写真8 年表のレイアウトの検討段階では、このような展示構成のプランもあった。



写真9 実際の会場にて、トレーシングペーパーの透過度や、展示台の高さ、角度を検討した。



写真10 会場の製作。鉄製足場材を組み、そこに木製の展示台、プリントされた用紙を組み込む。



写真11 会場の製作。遮蔽された空間は、音楽室の備品や椅子などを格納するスペースでもある。



写真12 年表の製作。ステージに用紙を置き、位置決めしてから貼り合わせの作業を行った。



写真13 貼り合わされた年表を設置する。縦方向に延びる骨組みに年表をマウントする方法を採用。